



モモタの  
大ぼうけん

【ぼうけんのはじまり】

山にかこまれた小さな村に、モモタという名前  
の六才の男の子がすんでいました。

モモタは、この四月にヒーロー小学校の一年生に  
なったばかりです。

ヒーロー小学校では、ふつうのべん強のほか  
に、ゆうしゃになるためのべん強もします。

なぜなら、このあたりの山には、モンスター  
たちがすんでいて、人びとをこまらせるので、  
モンスターをやっつけてくれるゆうしゃがひつ  
つようという



わけなのです。

モモタは、けん玉けんぎがとくいでした。

でも、それよりももっと大だいすきなのが、ゲームで  
した。

一年生いちねんせいになったおいわいに、九千八百円きゅうせんぱちひゃくえんで買かって

もらったゲームきで、  
毎日まいにちゲームばかりして  
います。

ある日ひの夕方ゆふがた、モモ

タがいつものように  
ゲームをしていると、



お父さんがやってきて、大きな声を出しました。

「そんなにゲームばかりやってると、りっぱなゆうしやになれないぞ！」

おこられたモモタは、少し元気をなくして、下をおきました。

「今、村の外では、オツパイ山のラスボスというオニの王が下りてきては、町の人たちをこまらせているんだ。」

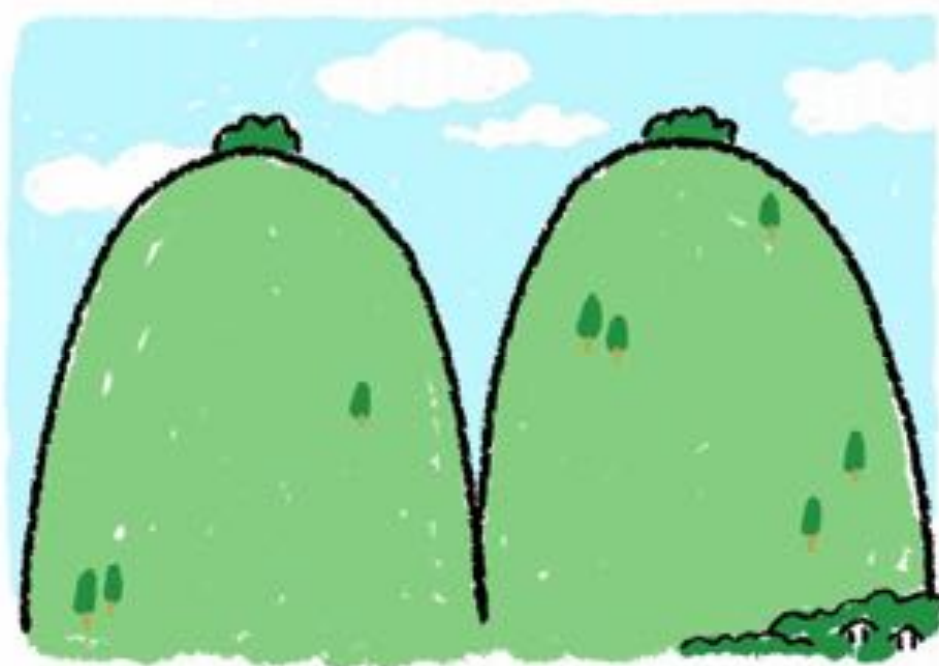
モモタははっと顔を上げました。町は、山のはんたいがわにあります。モモタのゲームきも、そこでお父さんにお金をだしてもらい、買ってもらったの

でした。「ぼくがオニをやっつけて、こまってる人

たちをたすけるよ。」

お父さんは、顔を右へ左へとゆっくりふりながら、「モモタはまだ一年生だ。とてもキケンすぎる。それに、ラスポスをやっつけるには、なかがひつようなんだ。」と、言いました。

その日は、ラスポスの話はそれでおしまいになりました。



でも、夜、ふとんに入ってからも、ラスポスのことが気になり、モモタはよくねおるできませんでした。

つぎの日、いつもより早く目をさましたモモタは、「なかまがいればいいんだよね。」と、つぶやきました。

「そうだ。オツパイ山に行きながらなかまをさがせばいいんだ。」

モモタは、耳に聞こえないほどの小さな声で言うと、ふとんから出てリビングへ下りていき、新聞を讀んでいたお父さんにおかかって言いました。



「お父さん、ぼく、行くよ！」

ラスポスをたおしに行く！」

「なかまは、いるのか？」

「今は、いない。でも、オツパ

イ山に行きながらさがすよ」

お父さんは、口に出しては言

いませんでしたが、ふかくうなずいてくれたのでした。

モモタは、リュックサックにけん玉と、お母さんが作ってくれた、赤いウメぼしの入ったおにぎりをつめて、オツパイ山におけて出ぱつしました。



【はじめてのなかま】

村を出て林の中を歩いていっていると、雨がふってききました。雨は、だんだん強くなってきます。

モモタは、木の下で雨やどりをすることにしませんでした。

丸い石にすわり、おにぎりを食べながら休んでいると、雨の音といっしょに、

「いたいじゃないか。わたしの上にすわっているのはだれだ？」

と、小さな声が聞こえました。



モモタが、びっくりして立ち上がると、丸い石からニヨキニヨキと足のようなものがたくさんあらわれしました。

なんと、丸い石のよ  
うなものは、大きなダン  
ゴ虫だったのです。  
「ご、ごめんよ、まさ  
かこんなに大きなダン  
ゴ虫がいるなんて、思  
わなかったんだよ。」



「なに。かまわんよ。おどかして、すまなかつたね。わたしは、ダンゴ虫むしのせかいの王きさまなのさ。名前なまはキングダンゴゴと言うい。みなからはキングとよばれているがね。きみはいつたい、こんなところになにをしているのかね？」

「ぼくはモモタ。オツパイ山やまのラスポスをたおしに行くんだ。」

「なに？　なんてゆうかんなんだ。よし、わたしもいっしょに行いこう。こう見みえても、手ておし車くるまで石いしや土つちをはこんでいるから、カかもちなのだ。」

「本当？ なかまがほしいと思っ  
ていたんだよ。」

「ところで、それ。なにかね。」

キングが、細い足を三本、モモ  
タのほうへおけました。

「ああ、これ。おにぎりだけど。

食べる？」

モモタが、おにぎりをさしだすと、キングは、右  
と左の足を二本ずつつかって、おにぎりを口にはこ  
んでいきました。





「人間の食べものも、なかなかいけるな。」  
「だろ？ とびきりおいしいおにぎりなんだ。」

話をしているうちに、  
雨もすっかりやみ、空も  
明るくなっていました。

モモタとキングは  
オツパイ山におけて歩  
きだしました。



【ふたりめのなかま】

林をぬけると、田んぼや竹  
やぶがつづき、その先は大草  
原でした。草の中に、ところ  
どころ白い花がさいています。  
歩いているうちに、夕日が  
しずんできました。

「キング、どこか休めるところをさがそう。」  
モモタがあたりを見わたすと、細い川がありまし  
た。そのよこに水車のある小やが見えましました。



「行ってみよう」

小やの近くまで行く

と、まどから明りがも

れていました。

モモタは、ドアを

ノックしました。

ドアはすぐにあいて、

中から、むらさき色のトンガリぼう子に、むらさき

色のふくをきた人が出てきました。大きなはなをし

ていて、はなの下には、長いヒゲがありました。





「すみません。きょう、とめてもらえませんか？」

モモタが言うのと、その人はだまったまま、へやの  
中に入るように手まねきをしました。

モモタとキングが円いテーブルにつくと、その人  
はコップに入ったピンク色の水のようなものをもっ  
てきてくれました。

モモタが一口のんだところで、キングが、

「まずい。ここは、まほうつかいの小やだ。今のん  
だのはどくかもしれない。」

「え？」

モモタの顔が、みるみる青ざめていきました。

しかし、どくではないことは、すぐに分かりました。

つかれてくたくただった体に、力がわいてきたのです。

「これ、かいふくポーションだ。学校でならったんだ。」

モモタが言うと、そのままほうつかいは、わらって、「そうじゃよ。どくなんて入れてないから、あんしんして、これもお食べ。」



貝かいがらのおさららにのせたりんごをさし出だしました。  
「わしは、まほうつかいのドローン。このあたりで、  
いろんなポジションを作つっているんじや。」

モモタは、キングと顔かおを見み合せあしました。

「ポジションを作つれるまほうつかいなら、ラスポスを  
たおすために大おほきな力ちからになっなってくれるにちがいな  
いよ」

「なんじやと。ラスポスをたおしに？」

ドローンが言いいました。

「そうなんだ」



モモタは、ドローンに今までのぼうけんの話をしました。

「ドローン、いっしょにきてくれない？ ラスポスをたおすには、もっとなかまがひつようなんだ。」  
ドローンは、立ったまま体を上下、左右にうごかしていましたが、

「よし。わしでよければ、いっしょに行こう。」  
と、言ってくれました。

家の外は、すっかり日がしずみ、丸い月がのぼっていました。

その夜、モモタとキン  
グは、ドロロンが作って  
くれたりょうりをおなか  
いっぱい食べ、竹ででき  
たベットでゆっくりねお  
りました。



【さんにんめのなかま】

つぎの日、モモタたちは、朝日あさひがのぼるころには、  
小こやを出でて、歩あきだしていました。

やがて、道みちが二ふたつに分わかれているところにきま  
た。

右みぎがわには大おおきな森もりが広ひろがり、左ひだりがわには草くさ原はらが  
つづいているのが見みえます。

めざすオツパイ山やまは、森もりのおこうにありました。  
三人さんにんは右みぎがわの道みちをえらびました。

道は、森にさしかかりました。

「モモタ、ここに、何か書いてある」

キングが、森の入り口の正めに立てふだを見つけた。

「モモタが読んでくれないか。わたしは、文字が読めないんだ。」

「うん。分った。なににな

に、『この先はキケン。

入るな！』だって。どう

する？」





モモタがふりかえると、ドローンが、  
「もどって、ほかの道を通ると、オツパイ山に行く  
のが十日はおくれるぞ。」

モモタは少し考えてから、

「このまますすもう。こまってる人たちを一日でも  
早くたすけるんだ！」

モモタたちは、森の中へ入っていきました。  
しばらく歩いていけると、まわりの木に矢がささっ  
ていることに気がつきました。

モモタはその矢の数をかぞえはじめました。

「一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本、九本、十本・・・」

どんどん矢の数はふえていきます。百本をこえ、

とうとう千本をこえました。

その時、とつぜん

「シュツ」という音がしたか

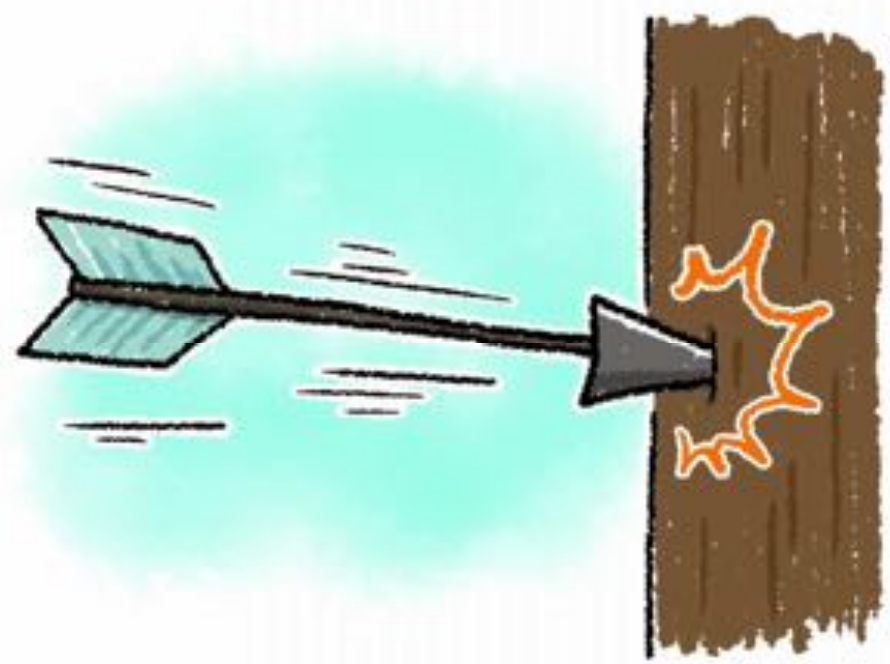
とおもうと、モモタの左耳の

近くを何かがかすめました。

うしろをふりかえると、木

に一本の矢がささっていまし

た。



矢がとんできたほうから「ガサガサ」という音が  
します。

モモタたちは、音のしたほうに、走っていきまし  
た。

音のぬしは、モモタたちからにげるように森のお  
くへときえていきます。

モモタたちが後をおうと、そこには、どうくつが  
ありました。

どうくつの前に一人のへいたいが、左手に弓、右  
手に矢をかまえて立っています。

へいたいの、よろいからのぞいているのは、  
人間

の手足ではありませんでした。  
白いホネだったので。

「スケルトンだ！ みんな気をつけろ！」  
ドローンが、さけびました。

そのとき、どうくつ  
の中から「ワンワン」  
という声が聞えてきて、  
白い子犬がしっぽをふ  
りながらスケルトンの  
前まで走ってきました。





その後につづいて、ウサギやシカ、リス、ネズミがスケルトンの後ろにあつまってきました。

「スケルトンは、森のどうぶつたちをまもってたんだ。」

モモタは言い、つづけてスケルトンにおかかって、「ぼくたちは、わるものじゃないよ。ラスボスをたおしに行くところちゅうなんだ。」

白い子犬が、モモタの足もとにきて、クンクンと、スニーカーのにおいをかいで、スケルトンのそばにもどっていきました。

スケルトンは弓と矢を下ろしました。

どうぶつたちは、スケルトンといっしょに、どうくつの中に入っていていました。

それから、どれくらい歩いたでしょうか。

どこまでもつづくとおもわれた森でしたが、ようやく出口が見えてきました。

ふと、後ろが気になってふりむくと、先ほどのスケルトンがついてきているのが見えました。

モモタは、ゆっくりとスケルトンに近づいて、

「どうしたんだい？」

と、たずねました。

スケルトンは、オツパイ山のほうをゆびさしました。

「いっしょに、行ってくれるの？」

モモタが聞くと、スケルトンはだまっただままうなずきました。

「ありがとう！」

モモタは、スケルトンのホネだけの手をにぎりましました。

「みんな、スケルトンがなかまになったよ！」

モモタが、スケルトンをつれてキングとドローンのそばへもどると、

「なんとよべば、よいの  
かな？」

キングが言いました。

「スケちゃんはどう？」

モモタが言う、スケ

ルトンは、カチャカチャ

と音を立てて、うれしそ

うにうなずきました。





【ラスボスとのたたかい】

それからモモタとキング、ドローン、スケちゃん  
の**四人**は、**雪女**の**すむ青い**こおりのおしろ、**ジュエー**  
**スの川**を**通**って、**オツパイ山**を**目**ざしてすすんでい  
ました。

モモタは、**家**を**出**たばかりのときとくらべると、  
**きん肉**が**つ**いて、**カ**も**強**くなり、**す**っかりたくまし  
くなっていました。

やがて、**目**の**前**に、**天**にとどきそうな**高**さの**火**の  
**山**が**見**えてきました。

「オツパイ山だ。ラスボスはその山のとっぺんにいるんだ。」

モモタたちのぼうけんは、おわりに近づこうと  
していました。

しばらく歩いてみると、  
木や草が少なくなり、  
赤い土と黒い石ばかりの  
けわしい山道にかわってき  
ました。



やがて、モモタたちの行く手をはばむかのように  
そびえるカベのような岩があらわれました。

「ここまで、きたのに……」

かたをおとすモモタに、スケちゃんが、ゆびをさ  
して見せました。

そこには、木のドアがついています。

モモタは、ドアの正めに立って、ドアノブを引  
いてみました。

カギがかかっているのか、びくともしません。

「わたしにまかせろ。」

キングが、みんなに、はなれているようにつげると、ドアにおかかってとつげきしました。

ドアは、メリメリ、と音を立てて、むこうがわにたおれました。

「やった！」

「この先に、ラスボスがいる。ここからはちゅういしてすすもう。」

モモタは、みんなに言いました。

じめじめしたくらいトンネルをぬけると、とつぜん、目の前が明るくなりました。



そこには、**金色**の**大きな**おしろがそびえていました。

おしろのまわりでは、ほのおがもえ**上**がり、まるで、**火**の池にまもられているようでした。

モモタたちは、おしろへつづく**細**いはしをわたっていきました。

そして、おしろのめいろのような**通**ろをたどって行くと、へやにつきあたりました。

**中**から、ゴーウ、ゴーウという**音**が聞こえてきます。

スケちゃんが、なんだろう、というように首をか  
しげます。

「わからない」

ささやくモモタの声は、ふるえていました。

「モモタ、こわいのか？」

キングのことばにモモタは、

「こ、こわいもんか。ここまできたんだ。ぼくが、  
ドアをあける」

ドアには、カギはかかっています。

中では、ラスポスが、大きな石のベットの上で、

いびきをかいてねていました。

頭には、長い一本のツノ、口からは、するどいキバがのぞいています。

「気づかれないように、近くまで行けないかな？」  
モモタが言うと、

ドローンが、

「すがたがきえる  
ポーションをのむ  
んじゃ」

モモタは、ド

ローンがわたしに  
くれたポーション



をのみ、すがたをけしてラスポスに近づきました。

リュックサックからけん玉をとり出すと、その糸でラスポスをベットにしばりつけました。

ラスポスが目ををさしました。

「なんだこれは？ うごけないぞ。こんな糸、切つてやる。」

ラスポスが、あばれだします。

「まずい。このままだと、にげられてしまうよ。」  
スケちゃんがとくい<sup>と</sup>の矢<sup>や</sup>をうちました。矢<sup>や</sup>は、みごとに、ラスポスの足<sup>あし</sup>にめい中<sup>ちゆう</sup>しました。



つづけて、キングが大きな石をもち上げてなげると、ラスポスの顔にめい中です。

ラスポスは、気をうしなっていました。

ラスポスをしばらくつけたままのベッドを、モモタたちは引きずって、おしろを出しました。

ラスポスは、そのままモモタたちによって、町ま



町の人たちは、手に石や木のぼうをもつて、あつまってきた。

「もうわるいことはしないから、ゆるしてくれえ。みんなからぬすんだものは、ぜんぶかえす。」  
ラスポスは、言いました。

「本当だな。もう二どと、わるいことをしちやだめだよ。」

こんかいだけは、ゆるしてあげようとモモタが言うと、町の人たちもさんせいしてくれました。

モモタが、けん玉の糸を切ると、ラスポスは、いちもくさんにオツパイ山へともどっていきました。

町の広場では、小さな男の子や女の子もまぎって、すべての人たちがあつまり、みんなでよろこびあいました。

町の人たちは、

「ありがとう。モモタたちのおかげで、へいわがもどった。あなたたちはりっぱなゆうしゃです。」

と、モモタたちをたたえました。

モモタたちは、つかれをとるため町で五日間ほど休みました。





【ぼうけんのおわり】

モモタたちは、自分たちの家に帰るため、町を出  
ました。

スケちゃんは、どうぶつたちのまっっている森に、  
ドローンは水車の小やへ  
と帰って行きました。

さいごにキングとわか  
れて、ようやくモモタの  
村につきました。





家が近づくのと、モモタのお父さんとお母さんが家の前でまっ待っているのが見えました。

「お父さん、お母さん、ただいまー！」  
モモタは、走ってかけよりました。

「よくがんばったな。モモタたちがラスポスをたおした話は、この村までとどいたよ。りっぱなゆうしゃになったな。」

お父さんは、大きな手でモモタの頭をなでてくれました。

家の中に入ると、お母さんがごちそうを作ってくれていました。

おなかをみたして、ゆっくりしていたモモタは、ふと、思い出したように、

「ああ、ひさしぶりにゲームがしたいな！」  
するとお父さんが、言いました。

「まずは、ぼうけんの間にたまった学校のしゅくだいをかたづけけないとな。」

「えー。そんない。」

なみだ目でモモタがお父さんを見ると、お父さんとお母さんは、かおを見あわせてわらっていました。モモタもいっしょにわらいだし、三人はいつまでもわらいつづけていました。



お  
わ  
り